ギリシャ思想で対話する「公共」の授業
―資料集『ライブ！2022』を活用して―

千葉県立市川東高等学校　星野 景一（ほしの・けいいち）

－使用教材－
『ライブ！2022　公共、現代社会を考える』

1 「公共の扉」と古代ギリシャ思想

学習指導要領における公民科「公共」の目標は、「人間と社会の在り方についての見方・考え方を働かせ、現代の諸課題を追究したり解決したりする活動を通して、広い視野に立ち、グローバル化する国際社会に主体的に生きる平和で民主的な国家及び社会の有為な形成者に必要な公民としての資質・能力を（略）育成することを目指す」である。その「見方･考え方」を育成するために、最初の大項目Ａ「公共の扉」をどう展開するかは重要なポイントである。それがこの後の大項目Ｂ、そして大項目Ｃにおける「見方・考え方」の基盤になる。こうした構成が、従来の「現代社会」と異なる特徴でもある。

だが同時に、ここで困惑している授業者も多いのではないか。**「公共的な空間」**という生徒にとってなじみのない言葉を軸に、**「社会に参画する自立した主体」**とは何かを問い、**「現代社会に生きる人間としての在り方生き方を探求する活動」**をさせるには、相応の工夫が必要である。

これからご紹介するのは、資料集『ライブ！ 2022 公共､現代社会を考える』(以下､「資料集」)p.23 ～ 24「Ⅰ 古代ギリシャの思想に学ぶ」を使用した、対話型の授業実践例である。

古代ギリシャ思想といえば「倫理」の印象が強いためか、「公共」で扱うことに抵抗を感じる授業者もいるようである。だが、すべての学問の原点であり、民主政治や教育の基盤になったものでもあるから、公民科の授業の導入でもある「公共の扉」ではぜひ活用したい。

古代ギリシャ思想は広大で奥が深いため、内容の精選と焦点化が重要である。「公共」は倫理分野を専門とする教員が担当しているとは限らないから、なおさらである。資料集ではソクラテスとプラトン、アリストテレスの３人だけが掲載され、思想内容も絞ってある。思想の詳細や他の思想家は「倫理」の授業に任せ､「公共の扉」における｢見方･考え方｣の手がかりに徹するわけである。

古代ギリシャ思想は高校でほぼ初めて学習する内容であり、基本的な知識を理解させなければ、その後の大項目ＢやＣで学習指導要領が求める「既習の学習の成果を生かす」ことが難しい。その上で学んだ知識を活用できるようにして後の授業へつなげていき、生徒自身が在り方生き方を主体的に考察していけるようにする必要がある。そのために､教員と生徒の対話が中心の授業を１時間、生徒どうしの対話中心の授業を１～２時間で実施したい。

初回授業の概要

導　入	Ⅰ　対話と哲学	５分
展　開	Ⅱ　ソクラテスの「無知の知」 Ⅲ　プラトンの理想主義 Ⅳ　アリストテレスの現実主義 ※教員と生徒、生徒どうしの対話を適宜入れる	40 分
まとめ	Ⅴ　あなたはどう考える ※対話による思索の深まりを確認 次回授業の説明と伏線	５分

2 対話と哲学

「公共」では現代に生きる私たちにとっての諸課題を考察するのだが、遠い昔のギリシャ思想が関係することは生徒には理解しにくい。

そこで授業の導入には、資料集 p.23 左下の、友達と会話する高校生の写真を使いたい（ 図１ ）。高校生活ではありふれた日常的光景であるから、「彼らは何を語り合っているんだろうね」と問えば、さまざまな答えが返ってくるだろう。

でも｢会話している彼らはどんな気持ちかな｣と問えば、答えはおおむね「楽しい」になる。そこで「会話はどうして楽しいの」と聞いてみる。「仲よくなれる」「他の人

現代に生きる孔子の教え～対話で生き方を探る～

いつの時代でも、人は自分がどう生きればよいのか迷い、悩む。独りで考える時間も必要だろう。しかし、ほかの人と対話することで疑問が解決したり、かつて同じような問題で悩んできた先人の思想に触れることで、今まで見えなかったことが見えてきたりするかもしれない。

「論語」は古代中国の思想家、孔子の言葉を弟子たちがまとめたものである。孔子と弟子たちとの対話から、「よく生きる」ために何が必要かを知ることができる。この教えは中国から日本など東アジア各地に広がり、現在でもさまざまな場面で学習され、社会規範や道徳に大きな影響を与えている。

↑「論語」を学ぶ中国の小学生（左）と孔子の像（右）

Question
・「よりよく生きる」ためにはどうしたらよいだろうか。（→目 目）

7 古代の哲学

Ⅰ 古代ギリシャの思想に学ぶ

↑友達と対話する高校生

今から2400年前の古代ギリシャのころから、よりよい生き方を求めることは人々にとって最重要課題だった。人々は、みずから思索を深めるとともに、師や友人と対話をしながら、よりよい生き方を模索していった。そうした歩みを学ぶことで、私たちにとってのよりよい生き方を考える手がかりにしてみよう。そして友人や家族などさまざまな人との対話を通して、考えを深め、共有していこう。

1 無知の知～ソクラテス～ 出題

↑友人に「よく生きること」を語るソクラテス

私自身はそこを立去りながら独りこう考えた．とにかく俺の方があの男よりは賢明である、なぜといえば、私達は二人とも、善についても美についても何も知っていないと思われるが、しかし、彼は何も知らないのに、何かを知っていると信じており、これに反して私は、何も知りもしないが、知っているとも思っていないからである。されば私は、少くとも自ら知らぬことを知っているとは思っていないかぎりにおいて、あの男よりも知慧の上で少しばかり優っているらしく思われる。
（プラトン 久保勉訳『ソクラテスの弁明』岩波書店）

23

チェック 答え ソクラテスは、善などについて完全には知っていないということの自覚が、真の知識への出発点であると主張した。（15年、考）

↑ソクラテス（前469ごろ～前399）

「自分は○○について知っている」と思う人は、それ以上、知ろうとしない。でも知らないことを自覚すれば、知りたいと思って学び、考える。学問は自分の無知を自覚し、真実を愛し求めることから始まるのだ。さて、私たちは自然や社会、人間などについて、何を知っているだろう。それらを分かったつもりで、大切な真実を見逃していないだろうか。

解説 **対話をして真実に気付かせる** 古代ギリシャのアテネでは、**ソフィスト**とよばれる職業教師が実用的知識や弁論術を市民に教えていた。哲学者**ソクラテス**は、ソフィストなど知識人たちと**問答**（→論）し、彼らが本当は何も知らないのに、知っているつもりになっていることに気付いた。自分も無知だが、知らないことを知っていると思う。この「**無知の知**」（→論）の立場に立ったソクラテスは、自分を知者とよばず、**愛知者**とよんだ。彼はアテネの街角で多くの市民と対話をしながら、彼らが「大切なことを何も知らない」ことに気付かせ、真の知識を生み出す手助けをした。**助産術**とよばれるこの方法は教育の原点だといわれる。また彼は、正しいことは何かを知り、それに従い行動することで幸福になると考えた。後に無実の罪で死刑を宣告された際、脱走を勧める友人へ「**ただ生きるのではなく、よく生きることが大切である**」と語り、判決に従った。

2 理想への憧れ～プラトン～ 出題

同じ料理を一緒に食べても、美味しく感じる人とまずく感じる人がいる。感覚は、人それぞれ違うのだ。でも１＋１は、誰もが２と答える。理性で考えることは、一つの結論に達することができるのだ。それならば、真実は理性によって把握できるのではないだろうか。

↑プラトン（前427ごろ～前347）主著『ソクラテスの弁明』『国家』。

解説 **完全な世界を目指す** ソクラテスの弟子**プラトン**は、現実は感覚の世界であり、移ろいゆく不完全なものと考えた。そして**理性**によってとらえられる完全な世界、**イデア界**を想定した。**理想主義**の立場から、現実の世界はイデア界の影だととらえたのである。私たちの精神もかつてはイデア界にいたので、イデアへの憧れを持っているとする。それをプラトンは**エロス**とよんだ。つまり、現実の世界で不完全さを自覚することから生まれる、完全な理想世界に憧れる愛である。ではエロスの目的は何か。それは最高のイデアである善のイデアに至ることだという。そこへ向けての努力でさまざまな徳が実現し、精神が完成されるのだ。完全なものや自分より優れたものへの憧れは、誰もが持つだろう。不完全な自分をより高めたいからだ。その過程で多くを学び、人間は精神的に成長する。理想を愛することは、よりよい人生を目指す力になるのだ。

←洞窟の比喩 感覚にとらわれた人間は、洞窟の中で奥を見ている囚人のように、イデアの影しか見ることができない。真実の姿を見るためには見方を変え、理性によって善のイデアに照らされるそれぞれのイデアを見なくてはならない。

3 現実から考える～アリストテレス～ 頻出

私たちは皆、今生きている現実の世界で幸せになりたいと願っている。でも、どうすれば幸福になれるのだろうか。どんな生き物も、その特長を発揮して生きるときが幸福である。魚なら泳いでいるときが幸せで、釣り人に釣り上げられて泳げなくなれば不幸である。泳ぐことが魚の特長だからだ。では人間の特長は何だろうか。

↑アリストテレス（前384～前322）主著『自然学』『形而上学』『ニコマコス倫理学』『政治学』。

解説 **理性を働かせて幸福を得る** プラトンの弟子**アリストテレス**は、動物にはない**人間だけの特長が理性**だとした。だから人間は理性を十分働かせ、それに従って生きることで**最高善である幸福が得られる**のだと考えた。

また、彼はプラトンのイデア論を批判し、**現実主義**の立場に立った。だから彼は愛についても、エロスとは異なる**フィリア**（**友愛**）を唱えた。人間どうし互いの人間性の善さにひかれ合い、肯定し合う対等な愛である。彼は「愛は、愛されることよりむしろ愛することにある」とも言う。相手を思う気持ちが美徳なのである。

←理想への「愛」と現実のなかの「愛」 愛には、大別して2種類ある。自分より優れていたり、美しかったりするものに対する憧れとしての愛。あるいは同じ立場で分かり合い、共感し合う友情のような愛。これらは理想への愛と、現実の中の愛とともいえる。

Ⅱ 古代中国の思想に学ぶ

古代中国では周が衰えた春秋時代の末から、諸侯が激しく覇権を争い、やがて有力な諸侯が自立して王になって戦国時代を迎えた。彼らは動乱の世を生き抜くため、多くの政治家や思想家を求めた。そして諸子百家とよばれる儒家、道家、墨家、法家、兵家、名家、縦横家などの学派が出現したのである。その中でも主流となったのは儒家と道家で、後の日本人の思想や生活にも大きな影響を与えている。また墨家は、戦乱の時代を改めようとする平和主義思想を主張している。

1 道徳で社会秩序を支える～儒家～
①孔子（こうし）～仁（じん）と礼（れい）～

学校では、「あいさつをしよう」「礼儀正しくしよう」と言われるのではないだろうか。それは社会人の必須条件だからだが、ではなぜそうなのだろう。

また、「親孝行」や年長者を敬うことが美徳とされることが多いが、かつては今以上に目上の人を大切にすることが重視されていた。年齢や立場による上下関係を明確にする考えには、どんな理由があるのだろうか。

↑孔子（前552ごろ～前479）本名は孔丘。儒教（→p.17）の始祖。主著『論語』（弟子たちが編纂）。

答え ○ ソクラテスの思想の原点であり、「無知の知」とよばれる。

24

図１『ライブ！ 2022　公共、現代社会を考える』p.23 ～ 24

の考えが分かる」「知らないことを知ったりする」「思っていることが言える」等々、多様な答えが返ってくるはずである。それらを「そう。そこがソクラテスのねらいだったのです」とまとめ、時代背景を解説する。

学問は古代ギリシャ哲学から始まったこと。ソクラテスが古代ギリシャのアテネで活躍した哲学者であること。当時のアテネでは世界で最初の民主政治が行われていたこと。それは成年男性市民全員による直接民主制だったこと。直接民主制は民主政治の本来の姿であるが、当時のアテネでは必ずしもうまくいっていなかったこと等を、簡潔に説明する。

そしてソクラテスが市民と対面で会話する「対話」を、日常的に行ってきたことを理解させる。そこから身近に行っている日常的な会話が、使い方しだいで哲学や政治とつながり、人間と社会をより高める力を秘めていることに気付かせたい。「公共」学習指導要領の「２　内容」「Ａ　公共の扉」においても、「対話を通して互いの様々な立場を理解し高め合うことのできる社会的な存在であること」について理解することが求められている。

3 ソクラテスの「無知の知」

ここから展開に入る。まずは資料集 p.23 右下のプラトン『ソクラテスの弁明』を、生徒１名に音読させる。読後にソクラテスが著作を書き残さなかったこと、弟子のプラトンが師ソクラテスに関する多数の著作を残していてこれもその一つであることを補足してから、資料の趣旨を読み取らせる。各自で考えさせてもよいし、グループで話し合わせてもよい。内容の読み取りが順調にいかない生徒がいれば、資料集 p.24 左上に 解説 が載っていることを教えて手助けをする。

ここで「無知の知」（不知の自覚）の概念が把握できれば、アテネの市民と対話し続けたソクラテスの姿勢が理解できるであろうし、学びの本質に思い至ることもできるだろう。その上で、「自分は大切なことをよく知らないのだと自覚することは、学問の始まりです。ソクラテスはそれを対話によって、アテネの市民がみずから気付くようにしむけていったのです。ソクラテスの母は助産師でした。助産師さんは他の人が子どもを産む手助けをします。それと同じで、市民が真の知を生む手助けをしたのです。これを**助産術**といいます」と解説する。

ここで、「このソクラテスのやり方は、教育の原点だといわれますが、それはなぜだと思いますか」と問いかけてみる。反応が乏しければ、「質問を変えます。皆さんは誰かに教えてもらった答えと、自分で見つけた答えと、どちらが知識として定着しますか」と問い直すとよい。大抵の生徒は後者を選ぶであろうから、それを踏まえて自分で真実を見つけさせるソクラテスの助産術が、教育の原点であることも解説する。必要に応じて「つま

り教育とは、答えを教えて暗記させるのではなく、自分で答えを見つける手助けをすることなのです。この授業もそうなのです」と補足すると理解が深まる。

そして資料集 p.24 のソクラテスの 解説 を参照させながら、「彼は正しいことは何かを知り、それに従って行動すれば幸福になれると考えました。当時、ソフィストとよばれていた知識人たちは、よいこと、正しいことは人によって違うと考えていました。でもソクラテスは、誰にとっても、どんな場合にもよいこと、正しいことはあるはずだと考えたのです。皆さんはどう思いますか」と問いかけたい。普遍性のある「よいこと」「正しいこと」の具体例を挙げさせると効果的である。

最後に「そんなソクラテスも、彼に批判された人たちによって裁判にかけられてしまいます。彼は無実であることを弁明しましたが、判決は有罪で、刑は死刑でした。彼は逃げることができ、友人もそれを勧めます。でも彼は、ただ生きるのではなく、よく生きることが大切であると語って、死刑を受け入れるのです」と説明し、「さて、よく生きることとは、どんな生き方でしょう」と問いかけてみる。これは次時でワークシートに書かせたり、話し合わせるので、ここでは深入りせず自由な発想で思いついた意見を述べさせたい。「冤罪で死刑になりそうだったら逃げること（逃げてでも生きのびることがよい生き方）」といった意見が出る場合もあるが、それでもかまわない。生徒がみずからの在り方生き方を考えることが目的であり、正解を決めつけたりせずプラトンに移る。

4 プラトンの理想主義

プラトンの思想を考えるには、まず感性と理性の違いをきちんと理解する必要がある。

まずは黒板に、２つのケースを板書する。

a）買い物に出て、店頭で食べたいお菓子を選ぶ。
b）高校卒業後の進路先を選ぶ。

「さて、どうやって選びますか」と聞けば、「a）はその日の気分で」「b）はいろいろよく考えて決める」といった答えが返ってくる。それを受けて「食べたいお菓子を選ぶのは主に感性で、卒業後の進路を選ぶのは主に理性です。心で感じるのが感性、頭で考えるのが理性と言いかえてもいい。学校の授業なら、芸術は感性で数学は理性、といえば分かりやすいですね」と説明する。そして「物事を判断するとき、感性で選ぶか理性で選ぶか。そこを意識すると適切な選択ができます」と補足すると、生徒が判断力を向上させる手がかりとなる。

続いて黒板に、２つの問いを板書する。

c）好きな食べ物は？
d）１＋１は？

まずc）を数名の生徒に答えさせ、続いて同じ生徒たちにd）を答えさせる。そして「好きな食べ物はバラバラでしたが、１＋１はみんな同じ答えでしたね。理性なら１つの答えに達することができるのです」とまとめてから、プラトンの解説をする。

ソクラテスの弟子であること。政治家を目指していたが、ソクラテスを無実の罪で死刑にするほどアテネの政治が腐敗していたため断念したこと、それでも哲学による理想の政治を追い求めたこと等を簡潔に述べる。

そして資料集 p.24 のプラトンの 解説 やイラストを使いながら、「プラトンは、理性によってとらえられる本当の姿、完全な姿をイデアとよびました。言いかえれば、理想の世界です。そして現実の世界で私たちが見たり聞いたりして感性でとらえているものはすべて、イデアの影だとしたのです。資料集の「洞窟の比喩」のイラストのとおりです。私たちの精神も、かつてはイデアの世界にあったから、イデアへ憧れる愛を持っているとプラトンは考えて、それをエロスとよびました。不完全を自覚した人間が、自分より価値あるものを求める愛ですね。エロスとはもともとは、ギリシャ神話に出てくる恋の神です。皆さんも、自分より優れている相手に憧れて、恋をすることもあるかもしれませんね」と説明する。

さらに、「恋をするのは、よいことでしょうか。悪いことでしょうか」と聞いてみたい。「よいこと」という意見が返ってくるであろうから、重ねて「恋をすることの、どんな点がよいのですか」と聞いてみる。「幸せな気持ちになる」「自分をよくしようとする」「相手のことを考えるようになる」等々、多彩な答えが返ってくるだろう。そこで、「恋をする、つまり理想を愛することは、自分を成長させることでもあるのです」とまとめて、アリストテレスへ進む。

5 アリストテレスの現実主義

まず、「アリストテレスはプラトンの弟子でした。でもプラトンの思想は間違いだと考えたのです。さあ、彼はどこが間違っていると考えたのでしょう」と問いかけて

みる。「理想ばかり考えていた」「現実をちゃんと見てない」「イデアって、そもそも何なの」といった意見が出ると展開しやすいが、何も出なければ「質問を変えます。理想と現実、どちらが大事かを選んでください」と問いかけて挙手させる。恐らく大半の生徒が現実を選ぶであろうから、その理由を問えばプラトンへの批判となる。

次に、「プラトンは、真実はイデアの世界にあると考えました。でもその世界はどこにあるのでしょうね。アリストテレスは、私たちは私たちの知っていることから始めなくてはならないと書いています。真実はここ、現実の世界にあるというわけです」と解説し、現実主義であることを理解させる。

続いて「動物と比べた人間の特長は何ですか」と問いかけてみる。「言葉を話せる」「道具が使える」「文明を築いた」等々いろいろ出るであろうから、「それらはつまり、理性を持っているということです。犬や猫に計算問題を渡してもできません。動物は理性を持たないからです。アリストテレスは、生き物はその特長を発揮しているときが幸せだと考えました。だから人間は理性を働かせ、それに従って生きることで、最高善である幸福が得られると考えたのです」と解説する。

そして資料集 p.24 のアリストテレスの 解説 やイラストを活用しながら、「アリストテレスは愛についても、お互いにひかれ合うフィリア（友愛）を唱えました。憧れではなく、現実における対等な愛ですね」と説明し、「皆さんはエロスとフィリア、どちらの愛に親近感を感じますか」と聞く。話し合いは次回行うので、ここでは問題提起にとどめておく。正義についても取り上げたいところであるが、欲張らずに割愛する。

6 あなたはどう考える

授業のまとめとして、「今日の授業は対話の意義から始まりました。実際に、私と皆さん、あるいは皆さんどうしで対話してみましたが、どうでしたか」と聞いてみる。肯定的な反応があれば望ましいが、なかったとしても「対話を重ねると、よりよい答えが生まれてくることがありますね」と述べて、次回以降の伏線とする。

順調に進めばここまでで１時間の授業となるが、これで終わりとせずもう１～２時間程度を使い、生徒どうしでさらに対話をさせたい。

そこで「いろんな問題を取り上げましたが、皆さんはそれぞれ、どう考えましたか。次回はそれらをもっと深く掘り下げます」と予告しておく。

次時の授業は、設問を載せたワークシートを用いてグループで話し合わせ、発表させる。設問は、「無知の知がなぜ学問の原点なのか」「よく生きることとは、どんなことか」「理想と現実なら、どちらが大事か」「エロスとフィリアなら、どちらを選ぶか」「理想の国はどんな国で、どうすれば実現するか」等、学習済みの内容を活用して「あなたならどう考えるか」と主体的な判断を迫るものにしたい。そして、「なぜそう考えるのか」と、判断の理由も述べさせる。

発表方法は、ワークシートを読み上げさせるだけではなく、同時にプロジェクターで投影するとよい。人数分印刷して配布する方法もある。授業時間に余裕があれば、ジグソー法で教え合うようにすると効果的である。

ディスカッションも可能であるが、事前に工夫が必要になる。例えばテーマが「よく生きること」であれば、「高校生として」等、場面をある程度限定しないと議論が成立しにくい。「理想と現実」なら、「理想」と「現実」が同数くらいに分かれれば対等な議論になるが、実際には多くの生徒が「現実」を選んでしまうので、「経済的なことは考えなくてよい」等、何か条件を加える必要がある。

いずれにせよ、結論めいたものを強引にまとめる必要は無い。生徒たちが思考と議論を通じて、「人間と社会の在り方についての見方・考え方を働かせ」られればよいのである。

最後に、授業内容を振り返るワークシートを生徒全員に配布し、対話を通じて考えたことや考えが変化したこと、今後さらに学びたいことや生かしたいこと等を記入させる。これはグループ学習で使用したワークシートや発表内容とともに、評価の対象とする。その際、「知識・技能」はグループ発表における先哲の思想の説明部分、「思考・判断・表現」はそれ以外の部分、「主体的に学習に取り組む態度」は学習へ取り組む姿勢や振り返りのワークシートにおける今後の意欲部分を中心に評価する。

2400 年前のギリシャ哲学者も現代の私たちと同様、人生の課題に悩んでいた。社会のあるべき姿を追い求め、現実との乖離に苦しんだ。理性の価値を重視する一方、愛や恋といった感性も決して軽視しなかった。対話の持つ大きな力も知っていた。現代の生徒がそこに気付き、先哲の思想を主体的に学んで、現代の諸課題を追究し解決するために活用できれば授業は成功である。そして対話の持つ力を体得し、民主的な議論が気軽にできるようになれば、彼らの生き方にもよい影響を及ぼすことであろう。

本授業展開例のワークシートは帝国書院ウェブサイトをご覧ください。